【書　評】

飯塚一郎『貨幣学説前史の研究』

相　見　志　郎

I

著者は，本書の「序」において，著者が本書を書くにあたってとった立場を，次のように表明している．

「経済学史の研究において，過去における経済諸理論がどのようにして構成されていったかということと同時に，それぞれの理論がどういった性格のものとして相互に関連しあっているかということを，理論的に分析解明することも重要な問題の一つではあるが，現在において問題となりうる諸理論が，どのような理論から発展的に形成されたかを分析解明することも，その理論の構造ないしは妥当性の理解にとって，また重要なことのように思われる．しかし，そのいずれの場合においても，研究者の頭脳のなかには，すでに過去から現在にいたるまでの経済学の発展のあとが，多かれ少なかれ認識されているはずである．元来，過去における一時点のある理論は，いちおう経済学のその後の発展の結果にかんする知識なしに，その時点にいたるまでの経済的発展の現実を背景とし，その時点における経済的要請をもとにして構成されたものである．ややもすると，われわれは事前にその後の知識をもって，過去における経済理論をつごうのいいように勝手な解釈をしていないであろうか．その意味でわれわれは，過去における経済理論がなにを主張し，なにを強調し，いかなる理論的性格のものであったかを，すなおに分析することが，まず最初の作業の一つであるように思われる．本書における研究は，こうした最初の作業の一つ一つをいちおうとりまとめたものである」(iii—iv頁．なお173頁参照) と．

経済学史の方法論ないし経済学史の型という問題に焦点をあわせていえば，たとえ

ば，杉本栄一『近代経済学史』の立場を借りていえば，本書は，ジィド・リスト型の立場を堅持するが，それをシュムペーター型にひきいれつつ，ザリーン型もしくは本来的意味における経済学史を志向しているもの，といえるであろう．しかし，もともと，経済学史の型をどのように分類してみても，それが相互に確然と区別されることは不可能であって，いずれの型も入りまじっているものである．ただどこに重点がおかれているかを示すものでしかない．著者は，謙虚に，本研究が，いわばジィド・リスト型を主目標としてはいるが，先に引用した文章が示すように，現在において問題となりうる諸理論が，どのような理論から発展的に形成されたかに一つの視点をあわせているのであるから，シュムペーター型の立場も示されていることになるし，更には，本来的意味における経済学史の形成への意慾も見られる．そして，著者は本研究を進めるにあたって，シュムペーターの『経済分析の歴史』と，レイモンド・ド・ローヴァーの研究を，二つの軸として，これに批判を加えるという態度を示しつつ，問題を展開させてゆく．

II

さて，著者の説明にしたがって，本書の内容を概観してみよう．たとえば，現在わが経済学史研究の分野で，一つの主たる研究分野になっているイギリスの重商主義の研究においても，その貨幣理論は，イギリスの研究だけに限定しているのでは十分な成果はあがらない．それには，ヨーロッパ大陸の学問，とりわけスコラ学の影響の有無を確かめる必要があり，そのためにもスコラ経済理論を明らかにしてゆかなければならないとして，著者は第1章で，スコラ経済理論の特徴とその評価の問題を取り扱う．第2章では，いちおう完成された形のスコラ学徒の経済理論として，前期スコラ学徒の最後の代表者としてのガブリエル・ビールの貨幣理論を分析の対象としている．第3・第4章で，ヨーロッパで最初にアメリカ産銀の流入と物価騰貴を経験し，しかも当時ヨーロッパでスコラ哲学頂点にたちつつ，最高の学問的水準を保持したといわれるスペインのサラマンカ大学における一連の経済理論（とくにその貨幣理論）を，ドミンゴ・デ・ソト，ルイス・サラビア，ペドロ・デ・バランシア，フランシスコ・ガルシア，アスピルクエタ・ナバールロ，トマス・デ・メルカード，マルティン・ゴンサーレス・デ・セリョリーゴ，ルイス・デ・モリーナの人々の著作を通じて検討している．第5章では，スコラ学徒ではない「世俗の人」の見解を知るために，ベルナルド・ダヴァンツァティの経済

理論が取り扱われているが，そこにもスコラ的影響の跡が見られることを指摘している．そして，第6章を，当時最も進歩的であったスコラ学徒の1人，フアン・デ・マリアーナの貨幣論の分析にあて，第7章で，著者は，以上の諸章で論じてきたところを，いちおう綜括しつつ，将来の問題への出発点としようとしている．

III

わが国においては，著者が取り扱っている範囲の研究には，ほとんどみるべきものがないといってよいであろう．著者は，ラテン語，イタリア語，スペイン語等のその豊富な語学力を駆使し，資料の極めて少ないこの分野において，おそらくは異常な努力をその背後に埋没させながら，資料をあつめられ，ここにその研究のいちおうの成果を示されたことは，高く評価されるべきであろう．しかも，こうした先駆的研究を進めるにあたって，いたずらにドグマ的な論述におちいることなく，丹念な研究態度を保持されていることに，私はまた，深い意義を認めるものである．今後，わが国において，この分野の研究が進められる場合には，本書は必ずやその土台となってゆくことであろう．

IV

しかし，私は著者の研究分野については，あまり知識もなく，教えられるところが多いものではあるけれども，これを経済学史の一研究としてみるとき，若干の問題と要望をもつものである．

第1に，「現在において問題となりうる諸理論が，どのような理論から発展的に形成されたかを分析解明することも，その理論の構造ないし妥当性の理解にとって，また重要である」という著者の一つの立場からであろうか，長期的・短期的，マクロ的・ミクロ的といったような現代的な概念が使用されているが，私には，少なくとも古典経済学の段階までは，こういった概念の想源をさぐるということは，極めて形式的な問題におちいるのみで，余り意義があるようには思われない．

第2に，著者の関心は，主として著者の取り扱う時代の貨幣理論の研究にあるわけであるが，この貨幣理論がある意味で当時の経済理論の核心を形成するものとするなら，その全体的な経済理論のなかで示される貨幣理論のもつ比重を，更には，当時の経済的現実との関連において説明する必要があるように思われる．たんに，主観的価値説，貨

幣数量説，購買力平価説の先駆をさぐるという立場よりみるのでなく，それぞれの経済的現実において，そうした概念を統一的に把握して，それが，その当時の経済的現実においていかなる意義をもっていたかを示してくれるならば，本書の価値は一段と高まったであろう．

もとより，著者がこの問題に何んらふれるところがなかったというのではない．たとえば著者はいう．「サラマンカ学派の経済理論の中心課題は，価値・価格(公正価格)，貨幣，為替にかんする問題であったと考えられる．そして，おおざっぱにいえば，価値，価格論において主観説，貨幣論において数量説，為替論において購買力平価説がとられていた点にその特徴をみいだすことができるであろう」(92頁) として，著者は，貨幣数量説形成の経済史的背景を求めて，「アリストテレスの貨幣不妊説と，キリスト教神学のusura 罪悪観の支配下にあって，商人たちの金融業務の発展という現実，事実上の利子が巧妙に陰蔽された為替取引の現実，グレッシャムのいう Marchauntes exchange の流行が，いかにして伝統的倫理観や神学の権威を否定することなく，この現実に妥当させ，かつ合法化することができるかの理論的説明を要求したものと考えられる」(169—170頁) と説明し，更に，「サラマンカの人々の思考過程ないしは意図は，実際的要請からはスコラ的方法にしたがって，購買力平価説→説貨幣数量説→価値数量説の過程をたどったが，理論形成の論理上からは，価値数量説→貨幣数量説→購買力平価説を展開していると考えられる．かくしてサラマンカ学派の購買力平価説は，為替取引を合法化し，理論的に肯定することにヨリ大きな努力がはらわれ，為替レート決定の理論としてはほとんど関心がはらわれていなかった」(171頁) と説明している．私は著者のこの見解は卓見であると考えるのであるが，もし著者がこうした観点を一歩進めて，為替理論が全体としての経済理論のなかにもつ比重を，それぞれの経済的現実において確認してゆくならば，イギリスの重商主義の初期の段階における，マリーンズとミッセルデン，マンなどの為替理論，ひいて経済理論の究明に，新しい光を投ずるものであろうと期待する．

第3に，経済的現実と経済理論の関連に対する以上のような著者の態度は，いわゆる「価値のパラドックス」の取り扱いにも示されるのではなかろうか．すなわち，著者はしばしば，「価値のパラドックス」という概念に焦点をあわせながら，価値論にふれている．そしてこれをスミスにまで延長して，エミール・コーダー氏のように，「もしス

ミスがこの概念（限界概念のこと—引用者）の発見を知っていたら，19世紀をまつまでもなく，恩師ハチスンからうけついだ伝統的概念である『有用性』と『稀少性』をさらに進めて，限界効用による『価値のパラドックス』の解決に貢献したであろう」（354頁）というが，スミスの使用価値，交換価値の概念は「価値のパラドックス」に重点をおいて考えるべきものでないように思われる．こうした著者の態度は，リカードが使用価値の概念を展開することなく交換価値の研究に入っていったことに対して，かるくもらしている著者の不満（16頁）とも関連しているようであり，検討を要すべき点であろう．

以上，私は本書を読んで若干の私の見解をのべてきたけれども，それは本書の内在的批判というよりも，主として私の希望をのべたものであり，新しい分野の研究をもたらした著者のこの労作の価値をそこなうものではない．